

手嶋龍一さん おすすめの 国際情勢が 分かる新書

面白いと思える本だけが
自分の血肉となる

外交ジャーナリストの手嶋龍一さんが力説するのは、「興味のないこと、面白くないものには手を出さないほうがいい」という読書セオリー。「知識を身に付けようなんて思って修行僧のように難しい本を読もうとしても、まず身に付きません。2〜3行読んで面白くない本は読み続けられないほうがいいし、下手な文章を読むのは体にも悪い(笑)。読書は快楽として味わうことで自分の血肉となるんです」

手嶋さんの視点

外交の本質はノンフィクションよりも小説に描かれている

「情報源の秘匿が鉄則である外交の世界は、ノンフィクションよりも小説を読むことで、深く分け入ることができます」。英国の諜報機関出身の作家による「ヒューマン・ファクター」は、東西冷戦の内在的な論理を知るのにおすすめです

『ヒューマン・ファクター』
クレアム・グリーン著 加賀山卓朗訳
ハヤカワepi文庫 1050円

インと外交」という新書。各国首脳の外交の裏事情を、晩餐会のワインや料理から読み取るという切り口が、「ワイン好きの人にはたまらなく面白い国際情勢の解説書になるはず」と言う。また、古典の名著を新書で読むなど、あえて硬派なものを選ぶこともすすめている。「一流の書き手による昔の名著も新書で復刻されている。30年、40年と読み継がれている本には、今読んでも色あせない説得力があるし、文章も美しい。お手軽な新書を読むよりも、世界を読み解く力が身に付くでしょう」

4 現代文明の「精神的な地理」を知る

『歴史の暮方 共産主義的人間』

林 達夫著
中公クラシックス 1680円

西洋精神史の研究者として思想界に大きな功績を残した著者が、欧米と日本の精神性を鋭くとらえた評論集。戦争直後に書かれた文章では、共産主義者を「どぎつい政治的宣伝は心理的な攻撃」と批判。「筋の通った切れ味のある文章に、すっきりした読後感を味わえる」

3 一度は読んでおきたい名著

『国際政治 一恐怖と希望』

高坂正典著
中公新書 693円

戦後日本を代表する国際政治学者によるロングセラー。単純な平和論を批判し、軍備、経済交流、国連などを通して、国際秩序を保つ現実的な指針をまとめている。「66年に書かれたが、内容は全く色あせていない。平易で分かりやすく、国際政治全体を見通せる名著」

2 国家間の情報戦はこうして行われる

『インテリジェンス 武器なき戦争』

手嶋龍一、佐藤 優著
幻冬舎新書 777円

「戦後最強の外交官」と呼ばれた佐藤優さんと手嶋さんによる、国家間の情報戦のプロフェッショナルな世界についての対談。「機密情報を意味する『インテリジェンス』を握るために、どれだけ複雑な情報戦が外交の場で繰り広げられているかが見えてくるはずです」

1 外交の舞台裏から見える真実

『ワインと外交』

西川 恵著
新潮新書 735円

毎日新聞のヨーロッパ特派員だった著者が、首脳の晩餐会で出されたメニューやワインの銘柄から、政治的な意図を読み解く。「自分も同行していた外交の場面で、彼はこんなに面白い素材を見いだしていたことに脱帽。食やワインから外交を知る楽しさを味わえる」

5 民族の本質が垣間見える

『アーロン収容所 一西欧ヒューマンイズムの限界』

会田雄次著
中公新書 735円

歴史学者として活躍した著者が、第二次大戦終期に英国軍の捕虜となり、ビルマの収容所に抑留された経験を書いた。「当時の日本人に対する人種差別の激しさが描かれている。今の日本人が読めば、西欧に対する全面的な憧れ感に疑問を持つかもしれない。民族の本質と埋まらない溝が垣間見える」



Profile

てしまりゅういち／NHKワシントン支局長時代、9.11テロ事件で11日間連続中継を担った。05年に外交ジャーナリスト・作家として独立。日本初のインテリジェンス小説『ウルトラ・ダラー』（新潮社）が話題に。近著に『葡萄酒か、さもなくば銃弾を』（講談社）。慶応義塾大学教授